教員志望度からみた体育の模擬授業の効果に関する事例的検討

A Case Study of the Effectiveness of Model Physical Education Classes Based on Teacher Aspirations

水﨑佑毅・坪井恭紀・瀬尾賢一郎

Ⅰ．はじめに

「実践的指導力」の育成が求められてから（中央教育審議会, 2006），教員養成を行う大学の多くは, 授業の中に模擬授業を取り入れ, 大学生のうちから「実践的指導力」を高めることを試みている．そのため，模擬授業は，教員を目指す大学生にとって重要な教育活動の一つと言える．

模擬授業が「実践的指導力」の育成に効果があるのかを検証するために，模擬授業実施前後の変化を調べた研究がいくつか報告されている．岸本（1995）は，保健体育の教員を目指す大学 3 年生を教師役と生徒役に分け，体育授業の体験学習の効果を検証している．教師役の学生が行った授業の時間は 15 分と短かったが，教師役と生徒役の経験をすることで，体験学習前に比べ授業を見る目（観察力）が高まると示唆している．また，木原他（2008）は，岸本同様の視点から，模擬授業の実施によって保健体育教員を目指す大学生の観察力が高まるかを検証した．この研究では，授業を実施している教員の姿が撮影された映像（以下: テスト映像）を作成し, 模擬授業前後でテスト映像視聴後の気づきがどのように変化するのかを調べた．その結果，主に教員の指導内容や態度に関すること，授業計画や授業環境の問題点に気づくようになると報告されている．他にも，小学校の教員を目指す学生を対象に，体育の模擬授業の効果を検証した研究からも同様の結果が報告されている（藤田・細越，2009; 徳永, 2009; 角南他, 2017).

また，模擬授業の効果を「省察」の観点から報告している研究もいくつかある.「省察」とは，何が問題であるかを明らかにし，その問題を解決するための

ふさわしい手段について考えをめぐらせ，実際に検証していくという探索的な思考の形式であり（秋田, 1996），模擬授業を実施することで，「省察」をする力が高まることが報告されている（藤田他, 2011；安倍他, 2018；上條, 2018）．例えば，藤田他（2011）は，体育の模擬授業実施後に毎回省察を記述させ，その内容の変化を調べている．その結果，模擬授業の実施によって省察をする視点が教員の指導内容や態度に関することから，教材や授業環境の良し悪しに関することに転換していくと報告している．まとめると，模擬授業は教員に求められる資質能力を高め，「実践的指導力」の向上に貢献していると言える．

しかし，これらの研究を鑑みたところ，模擬授業を実施する学生の教職に対する意欲や関心が考慮されていないという問題がある．具体的に言えば，教職課程に所属しながら，教員ではない職に就こうと考えている学生がいるかもしれない．4070 人の大学生を対象に，大学卒業後の進路の検討状況を学年ごとに調査した研究によると，1，2 年生では，「現在検討中である」もしくは，「まだ何も考えていない」と考えている学生が 70%以上いるのに対し，3 年生では，「希望進路の実現に向けて準備・活動中である」は 60.8%，「現在検討中である」は 28.6%，「まだ何も考えていない」が 6.0%であった（望月, 2008）．よって，3 年生になると現実的に自身の将来について考えていることが伺える．実際に，宮内（1986）は，大学生の進路発達に関する調査の結果から，大学 3 年生は現実的なキャリア目標に向けて分野を絞っていくと報告している．

以上のことから，大学 3 年次は将来就く職について現実的に向き合い，自身の適性に合っているかの判断が行われていると考えられる．そこで本研究では，教職に対する意識の違いを学年間で調べ，そうした背景を踏まえた上で，3 年生を対象に模擬授業の効果を調べた．具体的には，教員志望の大学 1 年生と教職課程に所属する 2，3 年生を対象に教員を目指すことについて意識調査を行い，学年間の意識の違いを検討することを第一の目的とした（調査 1）．さらに，教職課程の 3 年生を対象に模擬授業を実施し，模擬授業前後で教職に対する意識は変化するのかを検証することを第二の目的とした（調査 2）．

Ⅱ．調査 1

1．方法

a．調査対象者および調査期間

保健体育の教員を目指す本学学生 135 人を対象とした．学年の内訳は，1 年生は 82 人（男性 62 人，女性 20 人），2 年生は 31 人（男性 23 人，女性 8 人），3 年生は 22 人（男性 16 人，女性 6 人）であった．調査は 2020 年 9 月から 10 月に実施した．調査実施時に，調査目的や回答の利用方法，回答は強制でないことを説明し，未回答であっても成績に影響しないことを口頭で伝えた．また，得られたデータは個人が特定できないように処理することも併せて伝えた．以上の内容を説明後，調査への協力をお願いした．

b．調査項目の内容と作成方法

「教職に関する調査」をテーマに，学籍番号と名前を含む 13 項目の質問を作成した．質問内容は，表 1 に示した通りである．質問紙は，Google フォームを利用して作成し，スマートフォンで回答を求めた．

表1. 質問内容について

質問番号	質問項目	回答
1	学籍番号	記述
2	名前	記述
3	いつから教員を志望していますか。	小学校低学年 小学校中学年 小学校高学年 中学1年 中学2年 中学3年 高校1年 高校2年 高校3年 大学1年 大学2年 大学3年 その他
4	教員を志望するようになったきっかけについて教えてください（※複数選択可）。	両親の影響 兄弟、姉妹の影響 親戚の影響 友人の影響 小学校時代の教員の影響 中学校時代の教員の影響 高校時代の教員の影響 大学時代の教員の影響 スポーツクラブのコーチ、監督の影響 タレントの影響（スポーツ選手や俳優など） テレビ番組の影響（ドラマ、スポーツ、ドキュメンタリー） 特にない その他
5	大学入学時の教員志望度を10段階で教えてください。	1（全くなりたくない）～10（かなりなりたい）
6	現在の教員志望度を10段階で教えてください。	1（全くなりたくない）～10（かなりなりたい）
7	【現在の教員志望度が下がった人に質問です】なぜ、志望度は下がったのですか？	自由記述
8	【現在の教員志望度が上がった人に質問です】なぜ、志望度は上がったのですか？	自由記述
9	教育実習への期待度について10段階で教えてください。	1（全く期待していない）～10（かなり期待している）
10	教育実習への自信度について10段階で教えてください。	1（全く自信がない）～10（かなり自信がある）
11	教育実習への不安度について10段階で教えてください。	1（全く不安がない）～10（かなり不安である）
12	教員採用試験に向けて、現在どのくらいの時間勉強をしていますか？	30分未満 30分以上1時間未満 1時間以上2時間未満 2時間以上3時間未満 3時間以上4時間未満 4時間以上 まだ始めていない
13	【教員採用試験の勉強を始めている人に質問です】勉強の頻度を教えてください。	毎日 ほぼ毎日（週に4～6回） 週に2～3回 週に1回 2週間に1回 1ヶ月に1回 その他

c. 分析

本調査では教職及び教育実習に対する意識に関する 5 つの質問項目を分析対象とした．具体的な質問番号は，5 と 6，9～11 である．回答は 10 段階で行われ，選んだ数字を得点化した．例えば，質問内容が「現在の教員志望度を 10 段階で教えてください。」といった場合は，1 は 1 点，10 は 10 点とした．

調査 1 では，1 から 3 学年間の教職に関する意識の違いを検討するために，質問項目ごとに 1 要因分散分析を行った．主効果の検定には Tukey 法を用いた．調査 2 ではサッカー授業の 1 回目と 15 回目の教職に関する意識の違いを検討するために，質問項目ごとに対応のある t-検定を行った．すべての統計には，SPSS Statistics (IBM 社製, SPSS for windows ver.25) を用い，有意水準を 5% 未満とした．

2. 結果

図 1 は，5 つの質問項目の回答を得点化し，学年間で比較を行ったグラフである．質問項目ごとに一要因分散分析を行った結果，入学時の教員志望度においては，学年間の教職に対する意識の違いに有意な差は示されなかったが（$F(2) = 2.117$, $p = 0.12$, $\eta^2 = 0.03$），それ以外の項目では有意な差が示された（現在の教員志望度: $F(2) = 10.509$, $p < 0.001$, $\eta^2 = 0.61$; 教育実習への期待度: $F(2) = 5.01$, $p < 0.01$, $\eta^2 = 0.07$; 教育実習への自信度: $F(2) = 3.31$, $p < 0.05$, $\eta^2 = 0.05$; 教育実習への不安度: $F(2) = 7.18$, $p < 0.01$, $\eta^2 = 0.1$）．その後の検定の結果，現在の教員志望度は，3 年生よりも 1，2 年生の方が有意に高かった（$p < 0.001$）．教育実習への期待度は，3 年生よりも 2 年生の方が有意に高く（$p < 0.01$），次いで自信度は，3 年生よりも 1 年生の方が有意に高く（$p < 0.05$），最後に不安度は，1 年生が最も低かった（$p < 0.01$）．

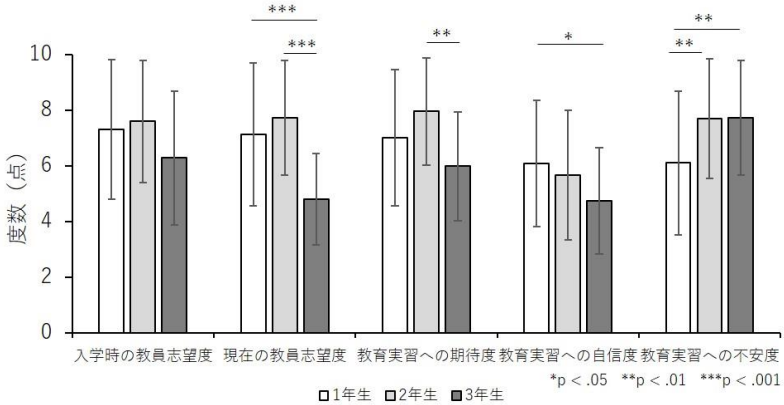

図 1. 学年間の教職及び教育実習に対する意識の違い

3. 考察

調査 1 の目的は，教員志望の大学 1 年生から 3 年生を対象に教員を目指すことについて意識調査を行い，学年間の意識の違いを検討することであった．調査の結果から，入学時の志望度を除く質問項目で学年間の意識の違いが確認できた．

まず, 入学時の教員志望度は学年間で違いは示されなかった. このことから, 入学当初は全学年同程度の気持ちで教員を志望していたと考えられる．具体的には，教員志望度の平均得点は 6～7 点程度なので，教員を目指すことに対してやや強い気持ちを持っていると言える．次に，現在の教員志望度は学年間で異なっており，他の学年に比べ 3 年生が最も志望度が低かった．この結果は，学年特有のものと考えられる．実際に，3 年次は職業選択が現実味を帯びてくる時期でもあり，自己分析も行われる（宮内, 1986）．そのため，教員に向いているかを現実的に考える時期とも言えるため，他の学年より教員への志望度が低くなっていると言える．

教育実習に関する意識調査の結果では，教育実習への期待，自信，不安，すべてにおいて 3 年生は他の学年と異なる結果を示した．まず，教育実習への期待度が 2 年生よりも低いことや, 教育実習への自信度が 1 年生より低いことは, 教員への志望度の低さが関係していると考えられる．教育実習への不安度は, 1 年生よりも高かったが，2 年生との比較では有意差は示されなかったため, この結果は，学年が上がるにつれて教育実習へ行くことが現実味を帯びていくことによるものと考えられる.

以上から，3 年生は教育実習への期待，自信が低く，不安が高いという特徴を示していた.

Ⅲ．調査 2

1．方法

a．調査対象者および調査期間

令和 2 年度後期に実施したサッカーⅠの授業を履修した 3 年生 20 人（男性 13 人，女性 7 人）を対象とした．模擬授業実施による効果を検証するために, 1 回目（令和 2 年 9 月 25 日）の調査を 1 回目の授業（オリエンテーション）終了後に行い，2 回目の調査は 15 回目（令和 3 年 1 月 31 日）の授業終了後に行った．最終的に 17 人（男性 11 人，女性 6 人）の学生から回答を得た（回収率: 85%). 調査は調査 1 と同様に行い, 調査実施時に, 調査目的や回答の利用方法, 回答は強制でないことを説明し，未回答であっても成績に影響しないことを口頭で伝えた．また，得られたデータは個人が特定できないように処理することも併せて伝えた．以上の内容を説明後，調査への協力をお願いした.

b. サッカーⅠの授業過程

サッカーⅠの授業過程は表 2 の通りである.

表 2. 授業過程

回	日程	テーマ	内容
1	9月25日	オリエンテーション	授業の進め方や指導案の書き方を説明
2	10月2日	技術指導およびゲーム	パス、ドリブル、シュートの指導
3	10月9日		
4	10月16日		
5	10月23日		
6	11月6日	模擬授業①	パス、ドリブル、シュートの3つから1つ選択し、模擬授業を実施する
7	11月13日	模擬授業②	
8	11月20日	模擬授業③	
9	11月27日	模擬授業④	
10	12月4日	模擬授業⑤	
11	12月11日	模擬授業⑥	
12	12月18日	模擬授業⑦	
13	12月25日	模擬授業⑧	
14	1月8日	模擬授業⑨	
15	1月31日	模擬授業⑩	

c. 模擬授業の準備と進め方

実施前に，模擬授業担当日と指導内容を決めた．指導内容は，パス・ドリブル・シュートの 3 つに分けて選択させ，同じ日に指導する学生の内容が被らないよう配慮した．学習指導案は，担当日の 1 週間前までに作成してもらい，添削を行った学習指導案に基づいて模擬授業を実施させた.

模擬授業の時間は 1 人 20～25 分とし, 1 回の授業で 2 人の学生が担当した．模擬授業後は，Google フォームを用いて評価シートを作成し，生徒役の学生からの意見や感想を求めた．評価シートの結果は，その日のうちに担当した学生に伝え，模擬授業に対する事後指導も行った．評価シートの内容と結果の内容例は表 3 の通りである.

表 3. 評価シートの内容と結果の内容例

質問番号	質問項目	回答
1	興味を持つことができましたか？	1（全くできなかった）～5（かなりできた）
2	進め方は良かったですか？	1（全く良くなかった）～5（かなり良かった）
3	熱意を感じることはできましたか？	1（全くできなかった）～5（かなりできた）
4	話し方（言葉・声の大きさなど）は良かったですか？	1（全く良くなかった）～5（かなり良かった）
5	授業後の満足度はどれくらいですか？	1（全く満足していない）～5（かなり満足した）
6	知識を獲得することはできましたか？	1（全くできなかった）～5（かなりできた）
7	技能を高めることはできましたか？	1（全くできなかった）～5（かなりできた）
8	【あなた自身の変化について】課題を発見することはできましたか？	1（全くできなかった）～5（かなりできた）
9	【あなた自身の変化について】他者に考えを伝えることはできましたか？	1（全くできなかった）～5（かなりできた）
10	【あなた自身の変化について】フェアプレイを大切にすることはできましたか？	1（全くできなかった）～5（かなりできた）
11	【あなた自身の変化について】お互いに教え合うことはできましたか？	1（全くできなかった）～5（かなりできた）
12	授業を受けて、気づいたこと、感じたこと、助言などがあれば記述してください	自由記述

質問番号	質問項目	平均得点
1	興味を持つことができましたか？	4.7
2	進め方は良かったですか？	4.5
3	熱意を感じることはできましたか？	4.5
4	話し方（言葉・声の大きさなど）は良かったですか？	4.9
5	授業後の満足度はどれくらいですか？	4.6
6	知識を獲得することはできましたか？	4.6
7	技能を高めることはできましたか？	4.5
8	【あなた自身の変化について】課題を発見することはできましたか？	4.5
9	【あなた自身の変化について】他者に考えを伝えることはできましたか？	4.4
10	【あなた自身の変化について】フェアプレイを大切にすることはできましたか？	4.5
11	【あなた自身の変化について】お互いに教え合うことはできましたか？	4.3
全体平均		4.6/5.0 点

ID	生徒役の学生からのコメント
1	パスが上手くなった
2	声かけとかもしっかりできていたのでよかった
3	人によって、ルールを変更していたので苦手な人もやりやすかったと思う。
4	流れがスムーズで内容理解に時間がかからなかった。
5	うまく出来ていない生徒へのアドバイスや、生徒が一生懸命取り組むような声かけがあって良いと思いました！技術と運動量がバランスよく獲得できる授業だと思いました！

2. 結果

模擬授業実施前後の教職及び教育実習に対する意識の違いを検討するために，各項目間で t-検定を行った．その結果，教育実習への自信度は 4.5 (SD＝3.3) 点から 5.8 (SD＝ 6.8) 点に増加した($t(32) = -1.74$, $p < 0.05$, $\Delta = 0.40$)．それ以外の項目では，模擬授業前後に有意な得点の変化は示されなかった（図 2).

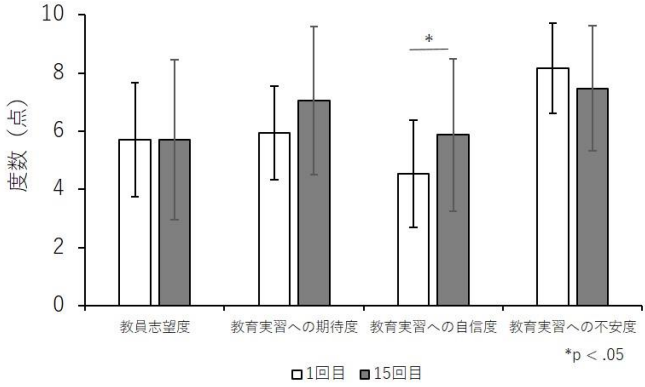

図 2. 模擬授業前後の教職及び教育実習に対する意識の違い

3. 考察

調査 2 の目的は，教職課程 3 年生を対象に模擬授業の効果を教職及び教育実習に対する意識の違いから検証することであった．調査の結果から，模擬授業を実施することで教育実習への自信度が高まることが示されたが，それ以外の項目は変化しなかった．

サッカーを履修した 3 年生の教員志望度は，模擬授業実施前は 5.7 (SD＝3.8) 点，実施後は 5.7 (SD=7.5) 点であったことから，模擬授業は教員への志望度を高める効果はないことが示唆された．3 年次は現実的な進路選択をする時期であるということから考えれば（宮内, 1986; 望月, 2008），本学の 3 年生は，教職課程に所属しながらも教員ではない職に就こうと考えているのかもしれない．教育実習に対しては，模擬授業の実施によって期待度を高めたり，不安度を減少させたりする効果は確認できなかったが，自信度を高める効果はあることが示された．模擬授業は，教員役や生徒役の実施によって，教員としての観察力や省察力を高めることが報告されているため（岸本, 1995; 木原他, 2008; 藤田他, 2011; 安倍他, 2018; 上條, 2018），そうした効果が自信を高めることに繋がったと考えられる．

Ⅳ．まとめ

本研究は，教職及び教育実習に対する意識の違いを学年間で調べ，そうした背景を踏まえた上で，3 年生を対象に模擬授業の効果を調べることを目的に実施した．その結果，教員志望度の低くなる 3 年生の特徴として以下の 3 点が明らかとなった．

(1) 他の学年に比べ，教育実習への期待度と自信度が低い．

(2) 他の学年に比べ，教育実習への不安度が高い．

(3) 模擬授業実施によって，教育実習への自信度は高くなる（回復する）．

本研究は，各学年の教職及び教育実習に対する意識の違いを横断的に検討したものであるため，今回の結果は学年の特徴を示しただけかもしれない．そのため，今後は調査対象者の追跡をするような形でデータをとる，縦断的調査が求められる．また，模擬授業の実施方法についても再検討を行い，改めて教員を目指したいと思える模擬授業を考案していくことも必要であるが，本研究では，2 年次の教員志望度が高かったことから，教員への期待が高いとも言えるこの時期に模擬授業を実施することで，現実的に教員を目指したいと思う学生を増やせるもしれない．

【参考資料】

・秋田喜代美（1996）『教師教育における「省察」概念の展開―反省的実践家を育てる教師教育をめぐって』世識書房.
・望月由起（2008）『大学生の学習・生活実態調査報告書　第 4 章　大学卒業後の進路』ベネッセ教育研究所.
・安倍健太郎・大西祐司・住本純（2018）「体育科模擬授業における教師役経験を通して身に付ける省察の観点」『研究紀要= Bulletin of Biwako Seikei Sport College』第 15 号, pp.63-71.
・角南良幸・高原和子・本山貢（2017）「小学校教員養成課程の体育科における模擬授業の効果: テキストマイニングによる自由記述形式の回答文に対する検討」『福岡女学院大学大学院紀要　発達教育学』第 3 号, pp.69-75.
・上條眞紀夫（2018）「大学教育における模擬授業の成果: 模擬授業テスト映像を見た省察の変容を通して」『総合福祉研究』第 22 号, pp.55-68.
・岸本肇（1995）「マイクロティーチングによる体育授業の体験学習の効果に関する研究」『神戸大学発達科学部研究紀要』第 2 号第 2 巻, pp.195-202.

・木原成一郎・日野克博・米村耕平・徳永隆治・松田恵示・岩田昌太郎（2008)「教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究―テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素」『広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　学習開発関連領域』第 57 号, pp.69-76.
・徳永隆治（2009)「模擬授業による体育授業づくりの意識形成に関する事例的研究」『 安田女子大学紀要』 第 37 号, pp.197-207.
・藤田育郎・細越淳二（2009)「体育科模擬授業における学習成果の検討」『 国士舘大学体育研究所報』第 27 号, pp.79-86.
・藤田育郎・岡出美則・長谷川悦示・三木ひろみ（2011)「教員養成課程の体育科模擬授業における 教師役経験の意義についての検討」『体育科教育学研究』第 27 号第 1 巻, pp.19-30.
・宮内博（1986）「青年期のキャリア意識の発達プロセスの実証的研究」『進路指導研究』第 7 号, pp.1-8.
・中央教育審議会（2006)「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申)」, 1.教員養成・免許制度の改革の基本的な考え方, 文部科学省ウェブサイト, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1336999.htm (最終閲覧日：令和 3 年 4 月 23 日).